

詩

【小学1年生・2年生】

特選

おうちかえってあそびたい

城南小学校1年

上田 紬葵

おうちにかえってあそびたい

おうちにかえってごはんたべたい

みんなであそぶとたのしいきもち

おうちにかえってピアノしたい

おうちにかえってゲームしたい

みんなでごはんたべたいなあ

きょうはなにをあそぼうかな

みんなであそびたいけど

おとうとはいたずらしないかな

(評) すなおな気持ちを、すなおなことばで書いていて、読んでいてもうれしくなります。おうちはやっぱりあたたかくて、すきながいっぱいできていいですね。

(彦根文芸協会 西村 和野)

準特選

すりすり

若葉小学校2年

北川 真衣

すきがすりすり

つりもすりすり

花もみんなすりすり

みんな大すりすりすり

くもはすわっている

でもみんなすりすり

ひこにゃんもすりすり

すきがおちばにかわった

ひこねじょうもすりすり

みんなともだちもすりすり

ゆうべもあめもすりすり

おちばもすりすり

(評) 「すりすり」ということばがくり返されていて楽しい詩ですね。いろんなものがすりすり。その中で「くもはすわっている」という表し方が光りますね。

(彦根文芸協会 西村 和野)

佳作

夏りようこう

稲枝東小学校2年

大西 和奏

夏りようこうで海にいったよ

夏りようこうでプールにいったよ

海では 足でパチャパチャ

プールでは およぐれんしゅうたのしいな

ホテルのごちそうおいしいな

みんなでたべたらもつとおいしい

たのしいな

佳作

きれいにそだってね

金城小学校1年

松永

紗幸

でてない
でてない
でてない
でてない
でてない
でてない
でた！
さわったら
つるつる
みたら
めがねみたい
ちようちよみたい

入選

わたしは二ねんせいです

金城小学校2年

寺村

柚奈

プールだいすき二年生
くわがた大すき二年生
からあげ大すき二年生
かわいいもの大すき二年生
本が大すき二年生
おにごっこ大すき二年生
ともだち大すき二年生
大すきをもっとふやしたいな

入選

アイスクリーム

若葉小学校1年

杉本

明楽太

アイスクリーム
アイスクリーム
どこから
どこから
どこから
たべようかなあ
とけちゃうよ
でも
どこからたべようかなーあ

入選

わたしのあさがお

金城小学校1年

尾本

絢音

あさがおは
かたちが
まるくて
つるはめちやながいし
あさがとてもすきな
おはなで
いろがいろいろあるんだよ
あさがおのまんなが
ほしだよ
すごいね



【小学3年生・4年生】

特選

ぼくの日じょう

城東小学校4年

布施

智章

まっかな空になったとき
いつもいつも聞こえてくる
「エイ！」という気合が

土日の朝になったとき
いつもいつも聞こえてくる
「カキーン」というよい音が

九時や十時になったとき
いつもいつも聞こえてくる
「ゴーン」という音が

いつもいつも聞こえる音を聞くと
心がほっとする

（評）「いつもいつも」という言葉のくり返しが気持ちよく心に残ります。曜日や時こく・季節がちがうと、心に届く音もそれぞれに違った響きで聞こえてくるのですね。

最終行の「心がほっとする」の言葉から、作者の豊かな感じ方と落ちついたくらしの様子が伝わってくるよい作品です。

（彦根文芸協会 やまかみ まさよ）

特選

けしごむ

松宮

滯

ぼくは白いかみの上でスリスリと
あの黒い子を書いた文字をけている
ぼくはなんでもけせるわけではないんだよ
あの黒い子は けせるけど
いろいろな色のあの子はけせないんだ

ぼくは使われると小さくなる
あの黒い子はけずられると小さくなる
それはぼくがはたらいたしょうこ
ぼくは使われるとよごれる
でもあの黒い子は
よごれない どうしてだろう

ぼくは服をきている
あの黒い子もきてるんじゃないかな
服をきているっていったって
自分ではえらべないんだ
だから服をかえたいときは
ぼくのなかまに言えば
ほかの服だつてきられる

さっき言ったけど

ぼくは使われるとどんどん小さくなる

だから半分より小さくなったら

すてる子がいると思う

でもさいごまで使ってくれる子もいる

どっちの子が多いなんてわからないけど

さいごまで使ってくれる子が多かったらいいな

(評)「けしごむ」になりきった作者の世界に、読者は

引きこまれます。自分を小さくする相手の黒い子

(えんびつくん)との使われ方や服を比べ、やさ

しく心配もしてやりながら、親友のようにつき合

うけしごむくん。「さいごまで使ってほしい」とけ

しごむくんと共に訴^{うた}える作者の気持ちが強く伝

わってきます。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

準特選

かえる

城南小学校3年

上田

桜花

みどりでかわいいかえる

あめがふつてくると

おもいつきりあそぶ

はれの日は

ときどき

外に出て

はっぱの下でくもりになるのを

まつだろう

くもりになると

外に出て

あめがふるのをまつだろう

なつには日かげの下ですごし

冬には土にもぐり

あたたかいはるを

まつのだろう

(評)

「かわいいかえる」くんのようすをしつと見つめて
いる作者。「あめがふつてくると おもいつきり
あそぶ」けれども「はれの日は…」と天気や季節
の変化で変わるかえるくんのくらし方を温かく想
像しています。まい日、やさしい目でかえるくん
に話しかける作者の姿が浮かんできて、思わずほ
えんでしまいます。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



準特選

秋になったらうちのねこは

城東小学校4年

國枝 奈乃葉

うちのねこ 秋になると

まどにすわって あみどにしろよ

ニャーとなく

しかたなくあみどにすると よろこんだ

秋の風にふかれながら

まわりをみわたす うちのねこ

みつけたのは もみじの木

それをずっとみつめてた

(評) かわいがっている「ねこ」を落ちついた視線で

観察しています。鳴き声で気持ちがわかるのですね。長い題名からも、作者とねこのあたたかいつながりが感じとれます。ねこも秋風と紅葉したもみじがすきなですね。

作者の静かでやさしい心とくらし方が、じいーんと伝わってくる作品です。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

準特選

心

城北小学校4年

中島 知音

心は何色なんだろう

うれしいときはピンク色？

こまっっているときはあい色？

かなしいときはあお色？

おこっっているときは赤色？

うーん：

今考えているときは 何色なのかな

ねているときは 何色なのかな

気になるな

心は何色なんだろう

(評) その時々の中の心を色で表しているのですね。

毎日をいそがしく過ごしている時、この詩に出会ったら、はっとしてふと立ち止まるのではないのでしょうか。考えているとき・ねているときの色・心の色まで問いかけています。まわりの出来事や自分のくらし方や思いで変わる心のふしぎを素直な言葉で表せています。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

準特選

おみくじ

城東小学校3年

屋敷 明音

今日おみくじ引いた

大吉がでたよ

おとうさんにも

おかあさんにも

いもうとにもじまんした

じいじにじまんすると

じいじも大吉やったでえと

何回もじまんしてきたから

その場をさった

ばあばにじまんすると

すごいなあとはめてもらえた

いいことあるかな

たのしいことあるかな

わくわくして

おもわずスキップしたよ

(評)

おみくじの大吉が出て家族の前で大喜びする作者のようすが、目に見えて来ます。

同じ大吉だったじいじの何回もの自まんに負けないほどのばあばのほめ言葉に、はじめの喜びがもどり、「おもわずスキップした」作者。気持ちと行動の変化が、目の前で見ていのように生き生きと表現できています。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



佳作

はたらくステイックのり

旭森小学校3年

水谷 悠人

ぼくは はたらく 紙の上で

仕事が来ると 家を出て

紙の上を ペタペタ スイーツと

ひとつぱしり

仕事が終わると家でまったり

これが毎日のぼくのにつか

わしは 今日も 仕事をこなす

だけど だんだんと体がすりへって

ボロボロになってきた

ある日 新人が入ってきた

新人の体はともきれいだった

みとれてしまうくらい

それでもぼくは 負けじとがんばった

そしてわしはちかった

新人などに負けないぞ！

佳作

ピアノ

城東小学校3年

佐渡 知紗

うまくできたときは

音がキラキラしてきこえる

言われたことを

ぜんぶいしきしたら

いつでもうれしい

あのことは言ってもらえるかな

氷になりそうなくらい

あきらめずにひく

そろそろかな

先生のあのことは

「上手だね」

佳作

どんぐり

旭森小学校3年

藤田 美ら

ぼくは木からうまれる
 木からうまれて地面に落ちる
 ぼくは人にひろわれた
 人はどんぐりをひろつたら
 さいごにすてる
 ぼくのゆめは
 どんぐりごはん
 生^{なま}だったら
 食べれないけど
 やいたり
 あたためたりすると
 食べれる
 生^{なま}やミスをしたら
 中に
 よう虫がいる
 どんぐりごはんにするとおいしいよ

佳作

とんぼ

旭森小学校3年

音瀬 奏季

ヒューヒューとぶ
 つかれるけど
 あとからすぐとべる
 またおさんぽしようかな
 今日はどこをさんぽしよう
 人につかまったらとべない
 はねをつかまったら少しいたい
 手をはなしたすきに速くとぶ
 今日はすずしくていいな
 さいきんほかのなかまも見ないし
 だいじょうぶかな
 明日もがんばつてとぶぞ
 なかまに早くあつていつしよにとびたいな
 夕日がおちた
 今日はいっぱいねよう
 さあ明日もがんばるぞ

佳作

大豆

旭森小学校3年

鶴賀谷 奏音

ぼくは しゅうかくされて
 いろんな食べ物になるんだ
 でもなるにはかくなしれんを
 のりこえないとだめなんだ
 ぼくのゆめはみそになること
 みそになつたらしんどいからだめって
 言われてる
 それならなつとうになろうかな
 でも大人たちにだめって
 言われる
 大人たちはえだまめくんとよんでいる
 大人になつたいま
 みそになるために入る
 じめじめしてるけど
 子どもの時のゆめを
 かなえるためにがんばろうと
 けっしんしたんだ

佳作

バトンの気持ち

旭森小学校3年

峠岡 真央

ブンブン動いてはたらく
人に手の中で
ギュッとにぎられるのは
あたり前
がんばっているしょうこ
今日は二時間がんばるぞ
ぼくのライバル
人を笑顔にする
ダンスをおどるとき
シュツと音がする
ぼくのときは
しんけんがお
笑ってほしいけど
笑わない
そんなあいつは
ライバルだ
うらやましいあいつ
ぼくもなりた
あいつにね

入選

こわーいテレビ

稲枝東小学校4年

大西 詩楽

夜の九時
こわーいテレビを見た
そんな時
わたしはトイレにいきたくなくなった
トイレのドアの前に立ったとき
こわくなった
テレビで見たさだ子がでてきたらどうしよう
ゆっくりゆっくり戸をあけて
パチン！
と電気をつけたとき
バツ！
と目をあけた
ふう
だれもない
安心してトイレをすませて
走って
走って
三步でいけるリビングへ
こわーいこわーいこのよるは
まだまだまだまだつづきます

入選

楽しい書道

金城小学校4年

岩崎 大知

えんぴつが一番書きやすい
スラスラ書いて楽しい
字も消せてまちがえても大丈夫
だからきれいに書ける
ペンはちがつて一番むずかしい
ペンの先が紙にひっかかって上手に書けない
でもスラスラ書けた時は楽しい
インクがなくなるからいやだ
ふではかんたんで一番とくい
使うすみは黒くて服についたらめだつ
すみを使う前のふでは書く部分がふわふわ
小ふでもふでと同じ
でも小さい字を書けるよ
それぞれいろんなしゅ類あつて楽しい

入選

ぼくが伝えたくて思うこと

金城小学校4年

西岡 紗希

ぼくは知ってる　そして思う
 なぜぼくは鳥なのにとべないの
 だから人間になると言われちゃう
 でも人間だつて言いたいことがあるんだよ
 他の生き物も　くまだつて
 へびだつてね　サメだつてね
 みんなみんな言いたいことがあるんだよ
 ぼくは知ってる　そして考える
 なんでなかまはずれがあるんだろう
 生き物だつて強くないといけないし
 人間だつて差べつがある
 ほんとにとつてもふしぎだな
 だからね生き物と人間つてにってるんだ
 だからさ　みんなみんななかよくしようよ

入選

かわいいあかちゃん

金城小学校4年

嶋田 望愛

ちいさくて　かわいい
 こけて　えんえん
 ねむたくて　すやすや
 ごはんを食べて　大きくなる
 たのしくて　わらう
 おふろ　ちゃぷちゃぷ
 てれびを　見る見る
 あそんでくれて　うれしい

入選

秋の旬

城東小学校4年

徳田 結仁

かきの秋
 なかはほっこりふつくら
 ぎらぎらたいよう
 ぎつしりおいしいな
 くりの秋
 なかはふつくら
 そとの入れものはとげとげ
 その中身はお月さま
 きらきらのお月さま
 きらきらのお月さまの下で
 もつつつとしたすこしかたいいろいろな色がある
 もつつつとしたおいしいおもち
 秋の季節には食べ物いっぱいだ

入選

学校の毎日

金城小学校4年

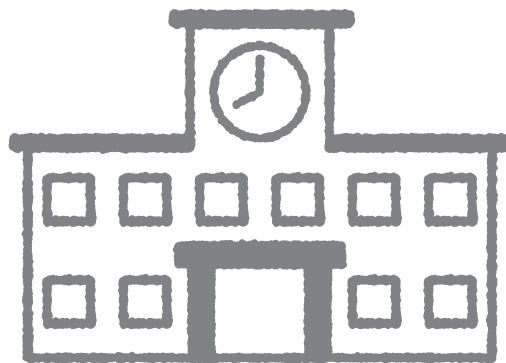
荒金

穂

じゅ業 いやだな
学校 いきたくないな
けど 友達には会える

じゅ業さんかん はずかしいな
先生におしえてもらう じゅ業
楽しいじゅ業もあれば いやなじゅ業もある

宿題 やりたくないな
明日 学校いきたくないな
そんな毎日



【小学5年生・6年生】

特選

私のじゅうでんき

城東小学校6年

片瀬 実優

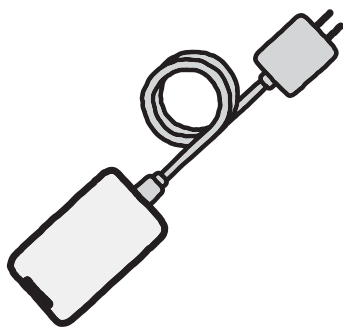
私のじゅうでんきは弟だ
いつも私のまねをして
あまえてばっかのじゅうでんき

ときにはいい合いしあったり
けんかもできるじゅうでんき
自分からじゅうでんしにいくじゅうでんき
そんなじゅうでんきにくつつくだけで
目がとろけちゃうじゅうでんき
まるでねこのじゅうでんき
ツンデレのじゅうでんき

じゅうでんしてるのに
気力をとられるじゅうでんき
あつかれた
今日もよろしくね
私のじゅうでんきさん

（評）弟は「私のじゅうでんき（充電器）」だという
思いつきが素晴らしいです。毎日のくらしの中の
よいこと・困ったことなどのすべてが私と弟との
愛情の往き来なのですね。「けんかもできる」
「くつつくだけで 目がとろけちゃう」「あつか
れた」などの感じ方や言葉の表現から、二人の様
子やつながりの深さが伝わってきて、思わず微笑
みます。

（彦根文芸協会 谷口 明美）



特選

観察力

金城小学校5年

島川 東子

めがねをかけた
最初はともはずかしかった
みんながおどろいた

かみの毛をばつさり切った
とてもすっきりした
みんなが気づいた

筆箱をかえた
とてもうれしかった
みんなは気づかなかった

みんなの観察力を感じた
自分の観察力はどれくらいだろう

(評) 初めて「めがねをかけた」「かみの毛をばつさり切った」などの際には、自分の喜びよりも「みんな」の反応(言葉・様子など)が気になりますね。それとは違い、他人には気付かれにくい「筆箱をかえた」時には、人目を気にせずに喜べます。その二つの場面の様子や自分の気持ちの違いを素直に表現できています。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

特 選

わたしの音

城東小学校6年

伊藤 真央

わたしの心はおしゃべりだ
きんちようするとドキドキして
びっくりするとドキツとして
こわくなるとドッキンドッキン
楽しくなるとおどるようにドキドキして
いやになるとおなかのしたでドキドキして
かなしくなるとギョツとする

いつでもわたしのことを
教えてくれている

(評) 「わたしの心はおしゃべりだ」という始めの一行に驚きました。大切な心臓の働きのことを気に止めずに毎日を過ごしている私たちとは違い、作者は「心はおしゃべりだ」とまるで親友か、もう一人の自分のように思っています。心の音と話し合い、音に「教え」られながら励んでいる作者の真面目な暮らしぶりが伝わって来ます。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

準特選

夕日

城東小学校6年

石田 風

宿題をしようとしていたら
オレンジ色の光が気になった
窓から外を見てみると
しみかけた夕日だった
たまごみたいだなと思っていたら
太陽はすがたを消していた

なんとなく母に言ってみた
「夕飯 たまごを食べたいな」

(評) 学校から帰った夕方のことですね。美しいオレンジ色に気持ち在和んだことでしょう。白い雲の中央に沈みかけた太陽を見つけたのですね。おなかもすいてきたのかな。
「なんとなく母に」「夕飯、たまごを食べたいな」といった作者の素直な気持ちが伝わってきます。夕食の卵料理はおいしかったことでしょう。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

準特選

ライバル

城南小学校5年

栗本

桜奈

私が いとこの家に遊びに行くと

二匹のネコが待っている

一匹のネコをなでると

もう一匹がよりそって

「あたしもなでてー」というように

ニヤーと鳴く

やがて おじいちゃんが

かつおぶしを開けると

えものをつかまえるように

もうスピードで

二匹のネコが走っていった

さつきまで私と遊んでいたのに

私より おやつの方がいいんだ

今日から私は

おやつとライバルになった

(評)

いとこの家の二匹のネコは、私を待っていてくれて、「あたしもなでてー」と鳴いていると思っていたのに、おじいちゃんのかつおぶしに「もうスピードで」走っていった二匹のネコ。作者の残念な思いが「今日から私はおやつとライバルになった」という言葉から強く伝わってきます。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



準特選

楽しい家族

金城小学校6年

北村

苺

笑い方がおもしろい

お母さん

鹿にかまれたことがある

動物好きな

お父さん

犬好きな家族の中で

ただ一人ねこ好き

最近 反抗期の

お姉ちゃん

大きすぎるスニーカーを

買って後悔

絵が好きな

自分

急に逆立ちしたくなる

ゆかいな家族

毎日おもしろい

(評) 四人の家族の日々の生活の中での失敗(鹿にかまれたお母さん、お姉さんの大きすぎたスーツケース)や好み(お父さんの猫好き、絵の好きな自分)や長所・短所などを短い言葉で、あたたかく愉快にとらえて表現できています。家族の笑い声や言葉のやりとりまで聞こえてきそうです。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

佳作

目薬どこだ

金城小学校5年

小川

葵瑚

学校に行こうと思ったら目がかゆい

目薬をさそう目薬を

たしかここにあったはず あれ ない

どこにやっただんどう目薬

どこにいったんどう目薬

「あつ! ポケットの中にあった!!」

こんなところにあった目薬

見つかってよかった目薬

「やつと目薬がさせる」

少し力を入れて目の上に

少し冷たいけれど スッキリする

まつ毛がじゃまでさしにくい

「ああ やっぱこれが一番だ」

行ってきますの合図で

わたしは学校に出かける

佳作

スクランブルエッグ

城東小学校6年

若林

美月

最近スクランブルエッグを作った

父のアドバイスをもらいながら作った

作ってるときは弱火でじっくりとした

学校では中火でささつとしていたので

変な感じだった

ジューとはあまり言ってなかったと思う

できたとき

見たらふわふわそうで

かいでみたバターみたいなにおいで

はしでつまんでみたらやわらかかった

食べてみたらバターみたいな味がした

それを家族に言ったら

「え?」と言われた

上手にできたとうれしい

佳作

かさの下

平田小学校6年

藤井 愛子

雨に打たれる水面
水面に映るあじさい
雨音さわぐ
かさの下
かさの下は一人の世界

佳作

学校の授業

金城小学校5年

山崎 優真

いつもちがう授業
とくいだったり苦手だったり
今日は算数 とくいな授業だ
いつもちがう授業
とくいだったり苦手だったり
今日は国語 苦手な授業だ
いつもちがう授業
好きだったりきらいだったり
今日は図工 好きな授業だ
いつもちがう授業
好きだったりきらいだったり
今日は体育 きらいな授業だ
いつもちがう
とくいだったり苦手だったり
好きだったりきらいだったり
でもやっぱりどの授業でも楽しいな

佳作

あの雲は・・・

金城小学校5年

富田 詠美

あの雲は
神様にしかつくれぬ
大きなわたあめだ

佳作

ペットのために使った三〇〇円

佐和山小学校5年

由良 日乃

ペットのために
おやつを買ってみた
おこづかいの三〇〇円を
使って
帰りながら
おいしそうに食べるところを
想像した
さっそく
あげると
「おいしくない」といわれ
青ざめるわたし
空にとんだ三〇〇円

入選

あの日の夕方ごろ

城東小学校6年

井上 昌信

あの日の夕方ごろ
君と歩いた落ち葉と紅葉の葉がまうあの道で
楽しく話し道をぬけたさきは
真つ赤な夕日が出むかえた
あの景色は
今でも忘れられない思い出
冬の日の夜ころ
街灯光る街の道で
秋と同じあの山道で
かたくみ君とだんを取り合い進んだ道
ぬけた先には 月と街の明かりが出むかえた
君と一緒に上から見た夜景は
一生物の宝物

入選

ぼくたちはゴミじゃない

金城小学校6年

西岡 陸杜

ぼくはお茶のペットボトル
飲み終わったら
ポイツと捨てられてしまった
それも道路の真ん中に
ああ
もうぼくは使われないのかな
そのとき
一人の小学生がぼくを拾い上げた
家に帰ってジャブジャブ洗ってくれた
ぼくの体がきれいになった
うれしいな
その子はぼくをふくろに入れて
どこかに連れていく
その子が入れてくれた箱の中には
仲間がたくさん
みんなピカピカになって
うれしそう
またもどってこれるんだ
ぼくたちは次へ生まれかわる

入選

夕方

平田小学校6年

川北

雨清

くらくらなってきた道を歩いたら

ぱっと明るくなった

見上げてみると

赤 オレンジにそまったくも

きつとくもが知らせてくれたんだ

「早く帰れ！早く帰れ！」と

夕方はやさしいんだ

ぼくたちに時間を知らせてくれる

だい二の時計なんだ

入選

私の心のぎもん

平田小学校6年

馬場

優海

感情はどこからわいてくるのだろう

頭かな

手かな

足かな

私はそれが

わからない

いかりやかなしみ

たくさんの感情があるけど

どれも同じところから

わいてくるのかな

私の心のぎもんは

深まるばかり

入選

びわ湖と自然

金城小学校6年

アハメド ターシイン

ビシャン ビシャン

大量の水

ガブツガブツ

おいしい魚

ずつとずつと いいにおい

びわ湖は日本の水のめぐみだ

ピーピー

と鳥の鳴き声

ポーポー

モーターボートの音

サラッサラッ

葉が落ちる音

びわ湖は音でいっぱいだ

バシャンバシャン

かがやく白波と

ハハハ

笑う子どもたち

びわ湖は楽しさと

美しさでいっぱいだ

入選

ぼくはだれでしょう

城東小学校6年

北村 実瑚

かあ かあ かあ かあ
ぼくは上からなんでもみえる

あーあんたはぼくにイタズラしたヒト

いくとしたつてもわすれないから

あーあなたはぼくをたすけてくれたヒト

いくとしたつてもわすれないよ

そんなぼくはだれでしょう

かあ かあ かあ かあ

じつはとつてもあたまが いいの

水がのみたきやじゃぐちをひねり

おなががすけばごみばこをみてー

ヒトからすればめいわくだけど

ぼくが生きていくためだからしかたのないの

そんなぼくはだれでしょう

かあ かあ かあ かあ

今日もぼくはないている

入選

たくさん学んだ修学旅行

金城小学校6年

橋本 実祐

修学旅行ではね

たくさんのことを学んだよ

最初は大阪

ピース大阪では

戦争のことについて学び

ひさんさを知ることができた

他にも

ミライザ大阪や大阪城もね

いろんなことを学んだよ

ホテルではね

楽しくてねれなかったな

キッザニアではね

四つの仕事体験をしたよ

どの仕事もすてきだなんて思えた

修学旅行ではね

戦争のこと

しょう来の仕事のこと

たくさん学べたよ

入選

戦争は

平田小学校6年

樋口 結心

戦争とは悲しいものだ

さびしいものだ

なにもやってないのに

お母さんお父さんがいなくなる

ぼくは悲しいさびしい

なんのために戦争があるの

楽しいから

いらいらするから

けんかをしているから

ぼくらはみな思う

戦争は悲しいさびしいもの

その思い 地球のはしまでとどいてほしい

【中学生】

特選

悩み事

南中学校1年

石橋

明莉

願い事

叶えてくれる流れ星

夜空を見上げ待ちわびる

どれだけ時間が経っただろう

ひとつも見えない流れ星

いつしか私の願い事

「流れ星が見えますように」に変わってた

本当は

一体何を願うのか

自分自身もわからない

真っ暗闇にたたずんで

キラキラと

光る何かを探してる

(評) 流れ星がなかなか見つからない間に願い事が変わってしまった、本当は何を願っていたのかわからなくなってしまう。こんな経験はみんなあるかもしれない。自分の気持ちの変化を素直に追っていくことの面白さが印象的な詩になっています。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

準特選

夏の続き

南中学校3年

國安

祐衣

ボールが私の横を通りすぎていく

私の夏が終わるその一瞬が

私には永遠のようだった

仲間と共に練習に励んだ日

試合に負けて悔しかった日

先輩に勝って嬉しかった日

上手くいかずに思い悩んだ日

その全ての思い出の波が私を包んだ

審判が得点板をめくる

十一対八

私の夏は終わってしまった

もう戻らない夏

私は今でも

あの夏の続きを夢みている

(評) 一生懸命努力を続けてきたことが、一瞬の結果で終わってしまった。その瞬間からスローモーションの映画のようにそれまでの時間が浮かび上がり、現在の自分につながっていく。ソネットのように短い詩で上手く描いています。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

佳作

もう一度

鳥居本中学校3年

押谷 栞花

照りつける太陽 青く光る大空
みんなの笑い声が聞こえ 思いだす
君と笑っていたあの日々が
もう一度会いたい そう思っても
もう一度遊びたい そう願っても
あの日々はもう遠くのこと

鈴を転がすように笑い 風のように走り
花のようにかわいく 星のようにきらめく
そんな君ともう一度
同じように笑いあい 同じように遊び
小麦色に肌をやき 同じように笑う
そんな日々をもう一度すごしたい

前に進めないこの僕を 過去に囚われたままの
僕を 手をのばせないこの僕を
君の笑顔で 君のぬくもりで 君の優しさで
君と同じところに 君とすごせる日々に行かせてくれないかな

入選

サボテン

西中学校1年

本田 彩葉

私のサボテン
とげがいたい
だけど私はそんなところも
かわいく思える
まるで我が子のようにだ



【総評】

(小学生の部)

詩を作ることは、むずかしいことはありません。詩はみなさんの心の中に住んでいます。まい日の行動や出来事の中で、あっと見つけたこと・思ったこと・感じたことなどをそのままの素直な短い言葉で書きとめると、それは”よい“詩です。書くことは、もう一人の自分と話し合うこと・思い出すこと・考えを深めることです。便利過ぎる生活に頼らず、日々の文字に書きとめる時間を生み出してください。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

(中学生の部)

小さな？をゆつくり考えてみましょう。

私たちは「なんでも前向きに考えて、頑張つて早く結果を出す！」ことが大事なのだと思われませんが、本当に必要なのは、小さな？をゆつくり考えることにあると私は思っています。中学生はいろいろな悩みに出会う時ですが、そこでゆつくり悩む力は、その人のこれからの人生を深く豊かなものにし、詩を書くことでその力は育まれます。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)